

## 善導における還相廻向の思想

小川 法道

はじめに

還相廻向とは、極楽往生した後、菩薩となり再び生死輪廻の世界に戻ってきて、その世界の衆生を教化し、仏道に向かわせる菩薩行のことをいう。その語の嚆矢は、曇鸞（四七六―五四二）の『往生論註』である。善導（六一三―六八一）自身は「還相廻向」（還相）という言葉を用いないが、思想としては見られるため、便宜上、本論では還相廻向の語を用いる。曇鸞の『往生論註』における「還相廻向」は多分に論じられているが、善導に関してはその限りではない<sup>①</sup>。まずは善導における還相廻向の用例を見て、その問題点を指摘したい。

問題の所在

善導は還相廻向に関して、『往生礼讃』前序では次のように述べている。

①五者回向門。所謂專心、若自作善根、及一切三乘五道一一聖凡等所作善根、深生隨喜。如諸佛菩薩所作隨喜、我亦如是隨喜、以此隨喜善根、及己所作善根、皆悉與衆生共之回向彼國。故名回向門。

又到彼國已、得六神通、回入生死、教化衆生、徹窮後際、心無厭足、乃至成佛、亦名回向門。<sup>②</sup>

すなわち「五念門の中の廻向門とは、心をもっぱらにして、自身で修める善根、およびあらゆる三乗の聖者や五道の凡夫が修める善根に対して、諸仏や菩薩が修める隨喜のように、私もそのように深く隨喜の心を起こす。この隨喜の善根および私が修める善根をことごとく衆生とともに極樂世界に往生するために廻向することをいう。よって廻向門という。また極樂世界に往生した後は、六神通を得て、生死輪廻の世界に帰って来て、衆生を教化し、それを未來世まで極め尽くし、心に飽くことなくして、ついに仏となることをまた廻向門という」としている。

ここでは五念門の廻向門を解釈する中で、還相廻向について述べている。極樂世界で「六神通」を得ることによって還相廻向することが可能となるといふ。

また『往生礼讚』では、いわゆる發願文において、次のように述べている。

②願弟子等、臨命終時、心不顛倒、心不錯亂、心不失念、身心無諸苦痛、身心快樂、如入禪定。聖衆現前、乘佛本願、上品往生、阿彌陀佛國。到彼國已、得六神通、入十方界、救攝苦衆生。虛空法界盡、我願亦如是。發願已、至心歸命阿彌陀佛。<sup>③</sup>

すなわち「願わくは弟子たちよ。〔次のような願を起しなさい。〕この命終わろうとする時に、心が乱れ誤った

考えに陥ることがなく、混乱することがなく、失念することがなく、身と心に様々な苦しみと痛みがなく、むしろ心地よく禪定に入るかのようにになりたい。「極樂にいる」聖衆が目の前に現れ、阿弥陀仏の本願に乗じて、極樂世界の上品の位に往生したい。極樂世界に往生した後は、六神通を得て、十方世界に入って、「たとえ」世界の果てのどこであろうとも、苦しむ衆生を救済しよう。私の願もまたそのようにしたい。願を起こし終わって、心から阿弥陀仏に帰依する」と述べている。

ここでは極樂往生した後に「六神通を得る」と説き、先の『往生礼讚』(①)と同じように、「六神通を得る」として共通している。

次に『観経疏』散善義の廻向発願心積では次のように述べている。

③又言回向者、生彼國已、還起大悲、回入生死、教化衆生、亦名回向也。<sup>④</sup>

すなわち「また廻向と言うのは、極樂世界に往生した後に、「娑婆世界に」帰って来て大悲を起こし、生死輪廻の世界に入り、衆生を教化することである。これをまた廻向という」としている。

『観経疏』では廻向発願心を解釈する中で、還相廻向について述べている。その中では、「大悲」と表現している。善導が還相廻向を述べる中で、『往生礼讚』と『観経疏』では構成はほぼ一致している。しかし前者では「六神通」と、後者では「大悲」との解釈の微妙な相違がある。なぜこのような解釈の相違があるのか、本論ではこの点について考察していく。

曇鸞における還相廻向

まず曇鸞『往生論註』における還相廻向の思想を見てみたい。世親『往生論』の五念門中、廻向門において「云何廻向。不捨一切苦惱衆生、心常作願、廻向爲首、得成就大悲心故」<sup>⑤</sup>とあるのを、曇鸞が註釈して次のように述べている。

廻向有二種相。一者往相、二者還相。往相者、以己功德、迴施一切衆生、作願共往生彼阿彌陀如來安樂淨土。還相者、生彼土已、得奢摩他、毗婆舍那、方便力成就、迴入生死稠林、教化一切衆生、共向佛道。若往若還、皆爲拔衆生渡生死海。是故言廻向爲首得成就大悲心故。<sup>⑥</sup>

ここでは「廻向に二種の特徴がある。一つには往相、二つには還相である。往相とは自身の功德をあらゆる衆生にめぐらし施して、ともに阿彌陀仏の安樂淨土に往生しようと願うことである。還相とは安樂淨土に往生した後は、奢摩他、毘婆舍那を得て、方便力を成就してから、再び生死輪廻が生い茂る林に帰って来て、あらゆる衆生を教化して、ともに仏道に向かうことである。往相であれ、還相であれ、みな衆生を生死輪廻の海から救済するためである。だから『往生論』には「廻向を第一とすることで、大悲心を成就することができるからである」と説いている」という。

『往生論註』の還相廻向と善導の『往生礼讚』(①)及び『觀經疏』(③)のそれとを比べてみると、構成上で一

致していることがわかる。このことから善導が曇鸞の影響を受けているといえる。<sup>(7)</sup>

### 『往生礼讃』における六神通

『往生礼讃』では「六神通」と表現されていたことは先に見た通りである。特に善導の発願文に関しては、すでに齊藤隆信によって三十卷『仏名経』の影響を受けているとの指摘がある。<sup>(8)</sup>そこでまず『仏名経』を見ていきたい。

願弟子等、承是懺悔、所生功德、願生生世世、永捨胎藏形、隨心願往生。獲六神通力、救攝諸苦衆、虚空法界盡、我願亦如是。<sup>(9)</sup>

すなわち「願わくは弟子たちよ。この懺悔を受けて、生ずる功德によって何度も生まれ変わり死に変わりする輪廻の世界から、永遠に抜け出ることを願い、また心にしたがって往生することを願う。六神通力を得て、〔たとえ〕世界の果てのどこであろうとも、苦しむ衆生を救済しよう。私の願もまたそのようにしたい」とする。

他にも『往生礼讃』には『仏名経』の影響を受けている所がある。いわゆる中夜の五悔中の発願において、善導は次のように述べている。

#### ④至心發願

願捨胎藏形 往生安樂國

善導における還相廻向の思想

速見彌陀佛 無邊功德身

奉觀諸如來 賢聖亦復然

獲六神通力 救攝苦衆生

虛空法界盡 我願亦如是

發願已至心歸命阿彌陀佛<sup>⑩</sup>

すなわち「心から願を起こす。願わくは輪廻の世界から抜け出て、安楽国に往生することを。速やかに阿彌陀仏の限らない功德の身を見て、諸々の仏や賢聖に出会いたい。六神通力を得て、「たとえ」世界の果てのどこであろうとも、苦しむ衆生を救済しよう。私の願もまたそのようにしたい。願を起こしおわって心から阿彌陀仏に帰依する」という。

『往生礼讚』と『仏名経』における構成、並びに「胎藏形」や「獲六神通力、救攝苦衆生、虚空法界盡、我願亦如是」という語まで一致している。特に「六神通」の語は、善導の五部九卷の内、先に挙げた『往生礼讚』の三方所しか見られない。類語の「六通<sup>⑪</sup>」は八回用いられている(表一)。しかし善導が「六通」の語をもって、還相廻向の思想を説く所はない。

ここまでのことを通して、『往生礼讚』では『仏名経』の影響を受けて、発願文や五悔中の発願を創作したことがわかる。善導はこの発願の創作の後、それによって、曇鸞の『往生論註』還相廻向では見られなかった「得六神通」(曇鸞の『往生論註』では「得奢摩他、毗婆舍那、方便力成就」である)を、自身の『往生礼讚』(①)に反映していることが知れるのである。

【表一】善導五部九卷における六神通（六通）の用例

六通	六神通	
1	3	往生礼讃
2	0	観経疏
1	0	観念法門
2	0	般舟讃
2	0	法事讃

『観経疏』における大悲

次に『観経疏』で見られた大悲について考察していく。この大悲と還相廻向に関しては、『観経疏』散善義の上品下生を解釈する所で見ることができ。善導は『観経』の上品下生の「また因果を信じて、大乘を謗せず、ただ無上道心を発す（亦信因果、不謗大乘、但發無上道心<sup>12</sup>）」の中、「但發無上道心」を解釈して次のように述べている。

⑤唯發一念厭苦、樂生諸佛境界、速滿菩薩大悲願行、還入生死、普度衆生。故名發菩提心也。<sup>13</sup>

すなわち「ただ一念を起こして苦を厭い、諸仏の世界に生まれ、速やかに菩薩の大悲の願と行を満たして、また生死輪廻の世界に帰って来て、あまねく衆生を済度しようと願う。だから發菩提心という」としている。

ここでは菩薩に対して「大悲」と用いられていることから、アビダルマの十八不共佛法で、仏だけが有する特質の一つである「大悲」の意味で用いられていないことがわかる。このことは次の『観経疏』定善義の一節からも知ることができる。

⑥浄土之中一切聖人、皆以無漏爲體、大悲爲用。畢竟常住、離於分段之生滅<sup>15</sup>

すなわち「浄土の中のあらゆる聖者は、みな無漏を本体とし、大悲をはたらきとしている。究極に常住であり、凡夫が生死輪廻の世界をさまようこと（分段生死）から離れている」という。

つまり分段生死を離れた一切の聖人が大悲のはたらきを有しているのである。

以上のことから善導は還相廻向を解釈する中で、『往生礼讃』では「六神通」と統一して使用し、『観経疏』では「大悲」と統一して使用していることが理解できる。

ではなぜ善導は『観経疏』の還相廻向において「大悲」の語を用いたのかを考えてみたい。先にも引用したけれども、今一度、曇鸞の『往生論註』を見てみたい。

迴向有二種相。一者往相、二者還相。往相者、以已功德、迴施一切衆生、作願共往生彼阿彌陀如來安樂淨土。還相者、生彼土已、得奢摩他、毗婆舍那、方便力成就、迴入生死稠林、教化一切衆生、共向佛道。若往若還、皆爲拔衆生渡生死海。是故言迴向爲首得成就大悲心故。<sup>16</sup>



曇鸞は往相にしる、還相にしる、衆生を生死輪廻の世界から救済することを廻向の目的としている。そのような廻向によって大悲心を成就することができるという。

また世親の『往生論』には、曇鸞の還相廻向の思想背景と考えられる「園林遊戯地門」がある。

出第五門者、以大慈悲、觀察一切苦惱衆生、示應化身、迴入生死園煩惱林中、遊戯神通、至教化地、以本願力迴向。故是名出第五門<sup>17</sup>。

すなわち「出の第五門（園林遊戯地門）」とは、大慈悲によって、あらゆる苦悩の衆生を觀察し、応化身を示し、生死輪廻の園と煩惱の林の中に入り、自在な神通力によって、教化する境地に至る。「仏の」本願力によって「衆生に」廻向するからである。このことを出の第五門と名付ける」とする。

善導は浄土にいる聖者は大悲をはたらきとする<sup>(6)</sup>ことから、利他行を極楽浄土に往生した後に修めると考えている。善導は曇鸞の『往生論註』における還相廻向の思想や、世親の『往生論』の「迴向爲首、得成就大悲心故」<sup>18</sup>あるいは「園林遊戯地門」の説示から、菩薩の大悲の利他行を看取し、『観経疏』において「大悲」の語を用いたと考えられる。

特に曇鸞の『往生論註』では「大悲」に関して、次のように述べている。

正道大慈悲出世善根生者、平等大道也。平等道所以名爲正道者、平等是諸法體相。以諸法平等故發心等。發心等故道等。道等故大慈悲等。大慈悲是佛道正因。故言正道大慈悲。慈悲有三緣。一者衆生緣、是小悲。二者法

縁、是中悲。三者無縁、是大悲。大悲即出世善也。安樂淨土從此大悲生故、故謂此大悲爲淨土之根。故曰出世善根生。<sup>(19)</sup>

ここは『往生論』の「正道大慈悲、出世善根生」を解釈している所である。すなわち『往生論』の「正道大慈悲出世善根生」とは、平等に開かれたさとりの道である。平等の道を「正道」というのは、平等は諸法の本体であるからである。諸法が平等であるから発心も平等である。発心が平等であるから道も平等である。道が平等であるから大慈悲も平等である。大慈悲はさとりの直接の原因である。だから「正道大慈悲」という。そもそも慈悲には三つの縁がある。一つには衆生縁、これは小悲である。二つには法縁、これは中悲である。三つには無縁、これは大悲である。大悲はすなわち出世の善本である。安樂淨土はこの「阿弥陀仏の」大悲から生じたものであるから、この大悲を淨土の根本とする。だから「出世善根生」という<sup>(20)</sup>として、<sup>(21)</sup>とここで「大悲」は『觀經疏』でよく用いられる語である(表二)。

【表二】善導五部九卷における大悲(大慈悲)の用例

大悲		
2	2	往生礼讚
1	18	觀經疏
0	1	觀念法門
1	1	般舟讚
7	10	法事讚

一見して、『観経疏』と『法事讃』において「大悲」の語がよく使われていることがわかる。その背景には、善導が『観経』に「仏心とは、これ大慈悲なり」<sup>22</sup>と説かれることを重視したことに関係があるのではなからうか。ともかく善導が『観経疏』の還相廻向において「大悲」を用いることは、善導自身が世親の『往生論』と曇鸞の『往生論註』を精読した結果によるものである。

#### 還相廻向思想から見る善導の著作前後論

これまでのことを通して、『往生礼讃』と『観経疏』のどちらが先に成立したかを考えてみたい。<sup>23</sup>先に見たように、『往生礼讃』の発願文(②)や五悔の中の発願(④)に使用される「六神通」は三十卷『仏名経』の影響を受けて創作されたものであり、それが『往生礼讃』廻向門の還相廻向の思想(①)に反映されている。一方、『観経疏』(③)では、世親の『往生論』や曇鸞の『往生論註』の説示に導かれて「大悲」と使用している。

もし善導の『往生礼讃』より先に『観経疏』が成立していたならば、善導は『往生礼讃』で安心(三心)・起行(五念門)・作業(四修)と順番に説明する中、三心の廻向発願心において、還相廻向を述べればいいはずなのに、五念門においてそれを述べている。<sup>24</sup>確かに『往生礼讃』の五念門を整備するために、還相廻向を後に置いたと考えるならば、それはその通りであるが、それならばなぜ『往生礼讃』では、『観経疏』の還相廻向の土台となる『往生論註』の「大悲」の語を用いずに、『仏名経』の「六神通」の語を用いたのが疑問に残る。このようなことから推測すれば、先に『往生礼讃』が成立し『仏名経』の影響によって、還相廻向の土台を作った後、善導自身が世親の『往生論』と曇鸞の『往生論註』を精読した結果、ならびに『観経』に説かれる仏の大慈悲の重視などの必要性

にかられて、「大悲」の語を取り入れたと考える方が自然ではなからうか。

このような考えが許されるならば、次のようなことが推測できる。『大智度論』卷二八には次のようにある。

經菩薩摩訶薩、欲住六神通、當學般若波羅蜜。

論問曰、如讚菩薩品中、言諸菩薩、皆得五神通。今何以言欲住六神通。

答曰、五通是菩薩所得。今欲住六神通、是佛所得。若菩薩得六神通、可如來難<sup>25</sup>。

【經】菩薩摩訶薩が六神通にとどまろうと願うならば、般若波羅蜜を修行しなさい。

【論】問う。讚菩薩品（菩薩功德積論）の中では、「諸々の菩薩はみな五神通を得る」といつている。今どうして「六神通にとどまろうと願う」というのか。

答える。五通は菩薩が得られるものである。今「六神通にとどまろうと願う」とは、これは仏が得られるものである。もし菩薩が六神通を得るならば、如来となってしまう難に陥ってしまう。

つまり仏だけが六神通を得、菩薩は五神通しか得られないというのである。このようなことから推測すれば、善導は仏だけにしか使えない「六神通」の語を避け、「大悲」の語を使用したと考えられる。<sup>26</sup>

『法事讚』における還相廻向

還相廻向の思想は、『往生礼讚』『観経疏』以外にも、『法事讚』でも見られる。とりわけ『法事讚』は『往生礼讚』の後に成立したと考えられている。<sup>27)</sup>『法事讚』巻下では『阿弥陀経』序分の対告衆である声聞・菩薩衆を解釈して、次のように述べている。

⑨願往生 願往生

與佛聲聞菩薩衆 同遊舍衛住祇園  
願閉三塗絶六道 開顯無生淨土門  
人天大衆皆來集 瞻仰尊顏聽未聞  
見佛聞經同得悟 畢命傾心入寶蓮  
誓到彌陀安養界 還來穢國度人天  
願我慈悲無際限 長時長劫報慈恩  
衆等同心生淨土 手執香華常供養<sup>28)</sup>

すなわち「仏は声聞と菩薩衆とともに、同じく舍衛国に行き祇園精舎にとどまって、三悪道を閉じ六道輪廻を断絶して、無生の淨土門を開くことを願う。人天の大衆はみな集まって来て、仏の尊顔を仰いでまだ聞いたことのない教えを聞く。仏を見て経を聞いて同じくさとりを得て、命終わるまで心を傾けて極楽世界の宝蓮に往生する。阿

弥陀仏の極樂世界に往生した後には、穢れた国土に帰つて来て人天を濟度する。願わくは我が慈悲が限りなく〔續いて濟度をし〕、長き間にわたつて仏の慈悲の恩恵に報いたい。大衆は心をめぐらして淨土に往生し、手に香と花を取つていつも供養しなさい」としている。

『法事讚』では「我が慈悲」すなわち自身の慈悲心と述べていることから、自身が菩薩となつて、菩薩行をして阿弥陀仏の慈悲の恩恵に報いたいという善導の強い決意が見られる。『往生礼讚』や『觀經疏』のように、還相廻向の思想からは著作前後に関する手がかりは見出すことはできないが、菩薩となる自身の問題として、還相廻向の思想が深化したものといえるだろう。善導は菩薩がいずれ成仏する仏道修行（利他行）において重要なものであるからこそ、還相廻向を説いているのである。

【表三】『往生礼讚』と『觀經疏』の比較

\*最後に比較を表にして載せておく。

『往生礼讚』〈三心〉

三者回向發願心。所作一切善根悉皆回願往生。故名回向發願心。<sup>(29)</sup>

〈五念門〉

五者回向門。所謂專心、若自作善根、及一切三乘五道一一聖凡等所作善根、深生隨喜。如諸佛菩薩所作隨喜、我亦如是隨喜、以此隨喜善根、及己所作善根、皆悉與衆生共之回向彼國。故名回向門。

〈還相廻向〉

又到彼國已、得六神通、回入生死、教化衆生、徹窮後際、心無厭足、乃至成佛、亦名回向門。<sup>(30)</sup>

『觀經疏』

三者迴向發願心。言迴向發願心者、過去及以今生身口意業所修世出世善根、及隨喜他一切凡聖身口意業所修世出世善根、以此自他所修善根、悉皆眞實深信心中、迴向願生彼國。故名迴向發願心也。<sup>(31)</sup>

〈還相廻向〉

又言回向者、生彼國已、還起大悲、回入生死、教化衆生、亦名回向也。<sup>(32)</sup>

おわりに

以上、善導における還相廻向の思想について見てきた。まとめると以下のようなになる。

- ① 「六神通」の語は善導の著作のうち、『往生礼讃』にしか見られない。それは三十卷『仏名経』の影響を受けたものである。
- ② 善導は『観経疏』の還相廻向を説く中では、「大悲」の語で統一している。その背景には世親の『往生論』や曇鸞の『往生論註』があると考えられる。ただし「大悲」はアビダルマ的な意味ではなく、大乘的な意味である。善導の還相廻向に関して「六神通」と「大悲」の解釈の相違が見られる。筆者はその相違をめぐって著作前後論から考察している。もし『観経疏』↓『往生礼讃』の順であるならば、善導はなぜ『往生礼讃』において『往生論註』の「大悲」の語を用いずに『仏名経』の「六神通」の語を用いたのか、に関して説明することが難しくなる。よって『往生礼讃』が『観経疏』より先に作られたと推測する。
- ③ そのような立場から考えると『大智度論』において、仏だけが六神通を得、菩薩は五神通しか得られないといわれていることから、善導はそれを避けるために「六神通」から「大悲」へと表現を変えたといえる。

そもそも善導の著作前後論は、善導の思想構築を考える上で重要となるものである。本論によって『往生礼讃』と『観経疏』の著作前後に関して決着をつけるものではなく、善導の著作前後論の解決となる一試論を提示することができたと考ええる。



【参考文献】

井ノ口泰淳「敦煌本「仏名経」の諸系統」(『東方学報』第三五冊、一九六四年)。

上野成観「善導著述前後関係の一考察」(『真宗研究会紀要』第三三号、二〇〇一年)。

近藤法雄「善導教学における信の確立」(平成二十八年年度 名古屋大学大学院 学位(課程博士)申請論文、二〇一六年)。

齊藤隆信「發願文小考—成立と展開—」(『浄土宗学研究』第二五号、一九九九年)。

齊藤隆信「中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として」(法蔵館、二〇一五年)。

柴田泰山「善導『観経疏』所説の「廻向發願心」について」(『印度学仏教学研究』第五三卷第一号、二〇〇四年)。後に『善導教学の研究』(山喜房仏書林、二〇〇六年)に収録される。

柴田泰山「善導『往生礼讃』所説の「広懺悔」について」(『印度学仏教学研究』第四七卷第二号、一九九九年)。(『大正大学綜合仏教研究所年報』第二二号、二〇〇〇年)。後に『善導教学の研究 第二卷』(山喜房仏書林、二〇一四年)に収録される。

柴田泰山「『往生礼讃』所説の發願文について」(『善導教学の研究 第三卷』山喜房仏書林、二〇二二年)。

藤堂恭俊「善導大師編著なる『往生礼讃』所説の五念門攷」(大正大学浄土学研究会編『小沢教授頌寿記念 善導大師の思想とその影響』大東出版社、一九七七年)。

殿内恒「善導教学における回向義」(『龍谷大学論集』第四六一号、二〇〇三年)。

廣川堯敏「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」(大正大学浄土学研究会編『小沢教授頌寿記念 善導大師の思想とその影響』大東出版社、一九七七年)。

深貝慈孝「善導における發願と誓願」(『日本仏教学会年報』第六〇号、一九九五年)。後に『中国浄土教と浄土宗学の研究』

(思文閣出版、二〇〇二年) に収録される。

「藤吉慈海「還相廻向論—浄土教における還相性の問題—」(『仏教文化研究』第九号、一九六〇年)。

藤吉慈海「往相と還相」(『浄土宗学研究』第一号、一九七九年)。

水谷幸正「発菩提心と廻向発願心—善導教学をめぐる—」(大正大学浄土学研究会編『小沢教授頌寿記念 善導大師の思想とその影響』大東出版社、一九七七年)。

註

- (1) 善導の還相廻向の思想そのものを取りあげた研究はない。ただし柴田泰山は善導の還相廻向の用例をまとめている。柴田泰山「善導『観経疏』所説の「廻向発願心」について」(『印度学仏教学研究』第五三卷第一号、二〇〇四年)。後に『善導教学の研究』(山喜房仏書林、二〇〇六年、三八七頁参照)に収録される。並びに柴田泰山「『往生礼讃』所説の発願文について」(『善導教学の研究 第三卷』山喜房佛書林、二〇二一年、五五四—五五五頁)参照。柴田泰山先生には、『善導教学の研究 第三卷』という貴重な書物を頂戴した。ここに感謝申し上げる。
- (2) 『往生礼讃』(『浄全』四・三五五a—b)。太字部分は筆者によるものである。また便宜上、善導の著作の引用のみ、①②③のように番号を振る。『往生礼讃』に関しては、他にもP3841・P2722・S2659に見ることができ。齊藤隆信「發願文小考—成立と展開—」(『浄土宗学研究』第二五号、一九九九年)参照。本文では基本的に「廻向」という語で統一したが、原文は原典のまま表記した。

(3) 『往生礼讃』(『浄全』四・三六〇a)。

(4) 『観経疏』散善義(『浄全』二・六〇b—六一a)。

- (5) 「云何が廻向する。一切苦悩の衆生を捨てず、心に常に作願し廻向するを首として、大悲心を成就することを得るが故に。」  
 『浄全』一・一九三、『大正』二六・二三二b。
- (6) 『往生論註』卷下(『浄全』一・二三九b―二四〇a)。
- (7) 『往生論』にも還相廻向の思想背景となる箇所がある。註(17)を参照。ここと善導の著作とを比較すると、還相廻向に関しては、世親より曇鸞の影響の方が強いと考えられる。
- (8) 齊藤隆信「發願文小考―成立と展開―」(『浄土宗学研究』第二五号、一九九九年)。
- (9) 『仏名経』(三十卷本)卷一四(『大正』一四・二四〇b)。また卷二九も全くの同文である(『大正』一四・二九八a)。
- (10) 『往生礼讚』(『浄全』四・三六五a―b)。
- (11) ちなみに道綽の『安樂集』では還相廻向を述べる中で「六通」と用いている。『安樂集』卷下「然迴向之功、不越於六。何等爲六。一者將所修諸業、迴向彌陀、既至彼國、還得六通、濟運衆生。此即不住道也」(『浄全』一・七〇七b)。他にも道綽の『安樂集』に還相廻向の思想を見ることが出来る。「一如大論云。譬如二人俱見父母眷屬没在深淵、一人直往盡力救之、力所不及相與俱没。一人遙走取一舟船、乘來濟接並得出難。菩薩亦爾。若未發心時、生死流轉、與衆生無別。但已發菩提心時、先願往生淨土、取大悲船、乘無礙辯才、入生死海、濟運衆生。二大論復云。菩薩生淨土、具大神通辯才無礙、教化衆生時、尚不能令衆生善滅惡、增道進位、稱菩薩意。若即在穢土拔濟者、闕無此益。如似逼鷄入水、豈能不濕也」(『浄全』一・七〇五b)。現代語訳については、齊藤隆信・曾和義宏・加藤弘孝・永田真隆・小川法道「『安樂集』」訳註(五)第七大門・第八大門・第九大門・第十大門・第十一大門・第十二大門」(『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第八号、二〇二二年刊行予定初校)を参照されたい。
- (12) 『觀經』(『浄全』一・四七)。

- (13) 『觀經疏』 散善義 (『淨全』二・六四a)。
- (14) たとえば『阿毘達磨俱舍論』卷二七には「智所成徳令當顯示。於中先辯佛不共徳、且初成佛盡智位、修不共佛法有十八種。何謂十八。頌曰、十八不共法、謂佛十力等。論曰、佛十力、四無畏、三念住、及大悲、如是合名爲十八不共法。唯於諸佛盡智時修、餘聖所無故名不共」(『大正』二九・一四〇a—b)とある。『望月仏教大辭典』(世界聖典刊行協會、一九七一年第六版)第三卷「十八不共法」の項目(二三六一—三三六頁)参照。
- (15) 『觀經疏』 定善義 (『淨全』二・五二a)。
- (16) 『往生論註』 卷下 (『淨全』一・三三九b—二四〇a)。
- (17) 『往生論』 (『淨全』一・一九八、『大正』二六・二三三a)。
- (18) 善導は『往生礼讃』において、「又菩薩已免生死、所作善法回求佛果、即是自利。教化衆生、盡未來際、即是利他」(『淨全』四・三五六a)と述べている。
- (19) 『往生論註』 卷上 (『淨全』一・二二四a)。
- (20) ちなみにこの『往生論』の「正道大慈悲、出世善根生」を、善導は『往生礼讃』(『淨全』四・三六五b)と『觀經疏』定善義の宝樹觀で引用しているのである。特に宝樹觀において、
- 此明諸寶林樹、皆從彌陀無漏心中流出。由佛心是無漏故、其樹亦是無漏也。讚云、正道大慈悲、出世善根生、淨光明滿足、如鏡日月輪。(『淨全』二・四一a)。
- 〔極樂世界の〕諸々の宝林樹は、すべて阿弥陀仏の煩惱のない無漏の心の中から流れ出たものである。仏心が無漏であるから、その樹もまた無漏であることを説いている。〔『淨土論』に〕讚えている。「さとりへの道である大慈悲は、出世の善根から生じる。清浄な光明を完成していることは、鏡や太陽や月のようにである」と。

と述べていることは、曇鸞のいう「安樂浄土はこの大悲より生ず」や「○○が故に○○等し」などがその思想的土台となっているとも考えられる。とりわけ『往生論』が讀んでいる意義（讀文の意義）を考えるならば、この『觀經疏』の一説は、曇鸞の『往生論註』の内容を持つてくることによって、理解がしやすくなるのである。

(21) 迦才『浄土論』巻上では、『大乘起信論』に説かれる三心のうちの大悲心と、『觀經』の三心のうち廻向發願心を同

一のものとして理解している。「三是大悲心。觀經名廻向發願心。若無大悲、即不能發願廻向。此亦義同名異也」(『浄全』六・六三五b)。柴田泰山『善導教学の研究』(山喜房佛書林、二〇〇六年、三八一頁) 参照。

(22) 『觀經』「佛心者、大慈悲是」(『浄全』一・四四)。ちなみに善導はこの箇所を『觀經疏』において「五には仏心は慈悲を体とす。この平等の大慈を以て、普く一切を摂することを明かす(五明佛心者慈悲爲體。以此平等大慈、普攝一切也)」(『浄全』二・四九b)と解釈する。また善導が「大悲」と使うのは、道綽の『安樂集』「取大悲船」の影響も考えられる。註(11) 参照。

(23) 善導の著作の成立順序に関しては、先行研究によれば、以下のようになる(ただし上野論文以前の研究に関しては上野論文を参照のこと)。

・上野成観 『觀念法門』↓『往生礼讚』↓『般舟讚』↓『觀經疏』↓『法事讚』

・柴田泰山 『觀念法門』(原本『觀念法門』)↓『五種増上縁義』↓『往生礼讚』↓『法事讚』↓『觀經疏』↓『般舟讚』

・齊藤隆信 初期(『觀念法門』『般舟讚』)↓中期(『觀經疏』『往生礼讚』)↓後期『法事讚』

・近藤法雄 『觀念法門』↓『往生礼讚』↓『法事讚』↓『觀經疏』・『般舟讚』

上野成観「善導著述前後関係の一考察」(『真宗研究会紀要』第三三号、二〇〇一年)。柴田泰山『善導教学の研究』(山喜房佛書林、二〇〇六年) 五三―七二頁。齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として』

(法藏館、二〇一五年) 二三一五六頁。近藤法雄『善導教学における信の確立』(平成二十八年年度 名古屋大学大学院 学位(課程博士) 申請論文、二〇一六年) 八頁の註六、一〇―一二頁、一四三―一四四頁参照。

- (24) 善導が『往生礼讃』の三心において「如觀經具說」(『浄全』四・三五四b)と述べたことを、良忠は「『往生礼讃私記』巻上において「如觀經具說者、疏名觀經」(『浄全』四・三八〇b)と解釈したことは、このような点から考えれば、否定することができよう。このような見解より先に、この良忠の解釈は齊藤隆信によって否定されている。齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として』(法藏館、二〇一五年) 三四頁参照。

- (25) 『大智度論』卷二八(『大正』二五・二六四a)。「望月仏教大辞典」(世界聖典刊行協会、一九七二年第六版)第五卷「六神通」の項目では、「五神通は菩薩の所得、六神通は唯佛の所得となせり」(五〇六〇頁)という。

- (26) ちなみに法然は「津戸の三郎へつかはす御返事(九月十八日付)」において、「カカル不信ノ衆生ノタメニ、慈悲ヲオコシテ、利益セムトオモフニツケテモ、トク極樂ヘマイリテ、サトリヲヒラキテ、生死ニカヘリテ、誹謗不信ノモノヲワタシテ、一切衆生アマネク利益セムトオモフヘキ事ニテ候也」(『昭法全』五〇三頁)と述べている。また「鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事」も同様に「サトリヲヒラキ」(『昭法全』五三〇頁)という。すなわち法然は「成仏」した後、還相廻向を行なうと解釈している。法然のこのような表現に関しては、本庄良文先生より御教示いただいた。ここに感謝申し上げる。

(27) 註(23) 参照。

(28) 『法事讃』卷下(『浄全』四・一六a)。

(29) 『往生礼讃』(『浄全』四・三五四b)。

(30) 『往生礼讃』(『浄全』四・三五四b)。

(31) 『観経疏』 散善義（『浄全』二・五八b―五九a）。

(32) 『観経疏』 散善義（『浄全』二・六〇b―六一a）。